

外海地区における隠れキリシタンと他宗教との関わりの変化

－枯松神社の祭礼を事例に－

青柳 沙彩

I はじめに

江戸時代の幕府によるキリシタン禁止令によって、キリシタンたちは強制改宗により、仏教を信仰しているかのように見せかけ、キリスト教を偽装棄教¹⁾しなくてはならなくなった。その後、禁教令が解かれ、信教の自由が認められた後、潜伏していたキリシタンたちは、3つのグループに分かれた。それは、①教会に戻り、カトリック信者になった人たち、②潜伏していた時代にお世話になったお寺に入り、仏教徒になった人たち、③隠れキリシタン²⁾と呼ばれることになる人たち、である。

長崎県長崎市旧外海町（以下、外海地区と呼ぶ）には、枯松神社と呼ばれる、キリシタンを祀った神社が存在する。この神社は、キリスト教を信仰することが許されず、200年以上もの間隠れ続けることになった人々の歴史が作り出した、ものである。この枯松神社で、2000年から枯松神社祭が行われるようになった。この祭りによって、3つのグループの関係に少しずつ変化が見られるようになったという。この祭りがどのようにして始まり、どのように人人の関係が変わっていったのか、また、今後の課題は何であるのかを、文献調査と聞き取り調査によって明らかにする。

なお、以下、聞き取り調査によって得たものを記述する際には、■を文頭につけて示すこととする。

II 外海地区の概要

1. 人口・交通・地理

2005年1月1日に出された推計人口³⁾によると、外海地区の人口は5,401人であった。鉄道は通っておらず、長崎市街へ行くには、バスを使うことになる。池島、松島、大島、面高、佐世保へは、フェリーも出ている。外海地区の東側は西彼杵半島中央の標高300-500mの山地、西側は角力灘が広がり、全体的に西向きの丘陵地となっている。外洋に面した海岸は、ほとんどが急峻な崖や転石海岸となっている。

2. 隠れキリシタン関連施設・遺跡

外海地区には、隠れキリシタン関連施設・遺跡が今でも多く残っている。図1の地図とともにその施設・遺跡を紹介する。

(1) バスチャン屋敷跡

日本人伝道士バスチャンが外海で潜伏していた場所で、現在は屋敷が復元されている。バスチャン暦⁴⁾もここでつくられたと言われている。

(2) 枯松神社



図1 外海地区のキリスト教関連遺跡と施設

注：ベースマップには、旧外海町が長崎市と合併する以前の地形図を使用した。

国土地理院発行 5万分の1地形図 長崎（1983年修正、1985年発行）、神浦（1984年修正、1985年発行）

口は狭いが、奥は10メートルほどの広さがある。

(4) 長崎市外海歴史民族資料館

外海地区の歴史がわかる資料館。キリスト教関係資料は2階に展示しており、ロザリオやマリア観音など、潜伏時代の信仰の足跡に触れることが出来る。

Ⅲ 外海地区のキリシタン

1. 歴史

近世初頭の長崎は、支配していた大村純忠がキリシタン信徒であり、住民すべてがキリシタンであったと言われている。仏教寺院は悉く破壊され、キリシタン以外は、転宗するか、退去を命じられた。そして、長崎茂木がイエズス会の教会に寄進されるに及んで、名実共にキリシタンの町になった。

1587年、豊臣秀吉の宣教師追放令が出されたにも関わらず、かえってキリシタンの数は増えていった。しかしながら、1600年頃から僅かながら仏教僧が長崎を訪れ、布教活動を行う

枯松神社は、日本にある、キリシタンを祀った3つの神社のうちの1つである。祀られているのは、外海で崇敬されているバスチャンの師であるサン・ジュアン⁵⁾である。現在の社は1989年にジュアンの墓の上に建てられたもので、2003年に改修工事されている。

また、枯松神社に行く途中の道には、隠れキリシタンが隠れて祈ったとされる、祈りの岩という巨大な岩がある。

(3) 次兵衛岩

金鍔次兵衛が潜伏していた岩窟。金鍔次兵衛とは、長崎奉行所の馬丁⁶⁾として潜入する一方牢屋に捕らえられていた外国人神父たちの教えを市中に潜むキリシタンたちに伝えた、まさに神出鬼没のヒーローのような存在であった。次兵衛岩に行く途中には、江戸時代、領民らが生計を立てるために木炭を焼いていた跡も点在する。岩窟の入り

ようになった。そして、1612年には直轄領における禁教令、翌年には全国に向けての禁教令が出されるに及んだ。

それでもなお信仰を守り続けた者たちは、表向きは仏教徒を装いながら、マリア観音を拝み、絵踏みの後、家に帰って、コンチリサンというオラショ⁷⁾を唱えて悔いを改めた。このオラショは、神父不在の下、罪を悔い、神に許しを請う祈りとして、代々伝えられるようになった。こうして、潜伏キリシタン⁸⁾独自の信仰へと変化していった。

その後、1657年、郡村の矢次の里に、天草四郎という12-13歳の少年がいて、その少年たちが洞窟にキリシタンの絵を隠し持ち、それを拝んでいる、という話が広まり、長崎奉行の耳に入った。長崎奉行は、直ちに、その時の藩主、大村純長に領内搜索を命じた。すぐに搜索を開始すると、郡村だけでなく、その周辺からも、608人ものキリシタンが捕らえられた。結局、取り調べの間に病死、衰弱死した78人を除き、99人が棄教を誓ったため釈放され、20人が終身刑、411人が斬首となった。これが、郡崩れと呼ばれる事件である。

郡崩れが藩に与えた衝撃は大きかった。当時大村領だった西彼杵半島は東西を二分して「外海」、「内海」と呼ばれていた。事件以降、西彼杵半島東側の「内海」は、監視の目が厳しくなり、キリシタンは姿を消したとされている。一方で、西彼杵半島西側の「外海」は、山の傾斜がきつく、交通の便も悪かったため、監視が行き届かず、多くの潜伏を許したとされる。また、外海一帯には佐賀藩の飛び地が点在しており、大村領と佐賀領の混在が、探索を難しくさせたともいわれている。

その後、1873年、禁教令が解かれ、潜伏キリシタンは、3つのグループへと分かれていった。その3つグループが、①カトリックに戻った人たち、②潜伏中にお世話になったお寺に入り、仏教徒になった人たち、③隠れキリシタンと呼ばれることになる人たち、である。

2. 信仰を支えたバスチャン

外海の人々のキリシタン信仰を支えた人として、バスチャンが挙げられる。バスチャンは、禁教令が発布された1600年代前半に実在した日本人伝道士で、キリシタン宗門に入ってサン・ジュアンの弟子となった。バスチャンはその霊名である。ジュアンの弟子として隠れてキリシタンの教えを布教していたが、師のジュアンの帰国後も、隠れながら外海地方の伝道が続けていた。現在も外海には、彼が潜伏していたとされる屋敷跡が残っている。長崎市檜山には、バスチャンゆかりの「ツバキ」の大木があったとされ、信仰の対象となった。こうしたバスチャンにまつわる伝説が代々信じられ、結束を強める役割を果たしたといわれている。

IV 枯松神社祭による3つのグループの関係の変化

1. 枯松神社祭とは

枯松神社祭とは、2000年から枯松神社で行われているお祭りである。サン・ジュアンと、その信仰を守り続けた先祖たちの霊を慰める祈りの行事である。毎年、カトリック教会の神父さまによる慰霊ミサ、お寺の住職さまによる講演、旧隠れキリシタンの代表者によるオラショ奉納などが行われており、宗教を超えた、お互いの理解を深める行事となっている。

2. 枯松神社祭の始まった経緯

今回、長崎市内のカトリック教会の神父をされていて、枯松神社祭を始めた方にお話を伺う

ことが出来た。以下の記述は、その方のお話をまとめたものである。

■外海地区には、信教の自由が許された後、カトリック信者に戻った人たち、弾圧の中、お世話になったお寺の信者になった人たち、そのままの信仰形態を守り続け、隠れキリシタンと呼ばれるようになった人たち、の3つのグループがある。この3つのグループは、同じキリスト教を信じていながら、歴史の中、弾圧をくぐり抜けてきたにも関わらず、3つの形態に分かれてしまった。枯松神社祭を始める以前の外海には、目には見えない鉄のカーテンのようなものがあつた。それは、歴史によって形態が分かれてしまった3つのグループの、お互いへの誤解からくるものであつた。その鉄のカーテンを取り払いたい、3グループのお互いへの誤解をなくし、和解させたい、という思いで、何か出来ないか考えるようになった。そして、3つのグループの共通の場所である枯松神社で、全3グループが納得して参加出来るような合同慰霊祭を開催することを企画するに至つた。

3. 枯松神社祭によって変わった、3つのグループの関係

今回は、既出の神父さまの他に、江戸時代の禁教令が出されていた時に潜伏キリシタンたちをかくまっていたお寺の現在の住職さまにもお話を伺うことが出来た。以下の記述は、その方と、既出の神父さまのお話をまとめたものである。

■全国各地に点在する隠れキリシタンとお寺の関係の中では異色というべきである。最初は潜伏キリシタンの信仰を隠すための方便に過ぎない関係だったが、長い年月の間に表面だけ仏教徒を装って神仏に帰依したふりをしている間に、知らず知らず神仏を拝むことも捨てがたい、という感情と、祖先を大切にする日本人の宗教的感情とが重なり合つて、寺との関係がとくに緊密になっていった。また、お寺の改修をした際に、その改修の費用として使ってください、と隠れキリシタンの人たちがお金を持って来てくれた。お互い、困つた時に助け合う精神は、日本人に潜在的に備わっているものだと感じた。(住職さま)

■以前は目には見えない鉄のカーテンのようなものがあつたが、今はそれが少しずつ取り払われて来ている。枯松神社を改修する際にも、3つのグループがそれぞれお金を出し合つて、改修することが出来た。3つのグループが納得して、1つのものをつくりあげていく過程で、誤解が消え、お互いを助け合い、協力する姿勢が出て来ている。(神父さま)

4. 今後の課題

最後に、住職さまが今後考えられることを語ってくださった。

■仏や神という違いはあつても、自然の中で生かされていた日本人は、シロやクロ、アカやシロ、という色だけでなく、グレーやピンクといった色を知っている。この自然観がある限り、お互いを許す心を持ち、相手を認め、寛容でいることが出来る。だから、対立することはない。しかし、多くの宗教は絶対的な存在は唯一無二で、別のものを認めようとしない。そんな、絶対的に相手を認めない集団が入つて来た時は、どうなるかわからない。ただ、海外から隠れキリシタンについて勉強をしにくる学生と話をする機会がある。最初は、信仰形態が大きく変わつてしまった隠れキリシタンを信じられないようだが、最後には、日本人の自然観を理解し、納得してくれる。今後も、日本人の自然観を失わずにいることが大切だ。

また、ただ歴史を考えるのではなく、それをもとに、現代人として今自分たちが何をしなくてはならないのかを考えることが必要である。

V おわりに

今回の調査では、3つのグループのうち、カトリック教会の方、お寺の方、の2つのグループの方のお話しか聞くことが出来ず、隠れキリシタンの方々の目線からのお話を聞くことが出来なかった。また、文献などからも、隠れキリシタンの方々の情報はほとんど得られなかった。今後、引き続き調査をするのであれば、隠れキリシタンの方々にも、お話を伺う必要があるとだろう。

もともとは同じ神を信じ、隠れることでしか信仰を守れず、いつかパードレ⁹⁾が現れるという予言を信じて弾圧に耐え、それをくぐり抜けた人々が、250年の潜伏を経て、3つのグループに分かれてしまったという悲しい歴史から、現在立ち直ろうとしている。

枯松神社は、歴史によって分かれてしまった3つのグループの、共通の心の拠り所のように感じた。そこで年に1度行われる枯松神社祭は、3つのグループの、お互いの誤解を取り除く手助けになっている。3つのグループが役割を分担し、協力し合って1つのものを作り上げていく過程で、お互いを理解し、尊重し合うことが出来るようになっていく。今後も、3つのグループがお互いを尊重し合い、理解を深めるために、枯松神社祭が重要な役割を担うことになるだろう。

日本にキリスト教が伝来してから、約470年が経ち、仏教もキリスト教も、時代の流れに翻弄されながら歩んできた。そんな中で、枯松神社祭は、同じ地域に住む人々が協力し合い、人々の本来持つ思いやりの心や絆、結束を感じる事が出来る。宗派を超えて集い、先祖たちに感謝する枯松神社祭の姿は、お互いの価値観の違いから衝突することがあまりに多い世の中で、私たちに大切なことを思い出させてくれる、数少ない機会だと感じた。

謝辞 今回聞き取り調査に協力してくださった、教会の神父さま、お寺の住職さまをはじめ、教会、お寺の方々、お忙しい中、時間を作ってくださり、調査に協力してくださって、ありがとうございました。

注

- 1) 自分が今まで信じてきた宗教を捨てたように表向きで振る舞いながら、密かにその信仰を継続する行為のこと。
- 2) 1873年に禁教令が解かれた後、潜伏キリシタンからカトリックに復帰せず、今もなお独自の信仰を守っている人々のこと。
- 3) 国勢調査を基礎として、毎月の出生・死亡・転入・転出を加減して算出された、推計値をもととした人口数である。この数字には、外国人も含まれる。実際に住んでいる者の全数調査である国勢調査人口に基づいた数値であるため、総人口を表すには、信頼性が高いものと考えられている。
- 4) 日本人伝道士バスチャンが作ったもので、恐らくキリシタン時代に出来た最後の教会暦である。
- 5) バスチャンの師であることはわかっているものの、詳しいことはわかっていない。
- 6) 今でいう、厩務員。馬の世話をする人のこと。
- 7) ラテン語が語源となった言葉。日本語、ポルトガル語、ラテン語からなる祈りの言葉で、

秘密の儀式として見張りを立て、布団を破り、口伝えに唱えて覚えていた。

- 8) 洗礼や教えを受ける宣教師が不在になってから 250 年のあいだ密かに信仰を守った潜伏時代のキリスト教信者。
- 9) キリスト教が日本に伝来した当時のカトリックの宣教師を指す言葉。ポルトガル語。

文献

遠藤周作・芸術新潮編集部編 2006. 『遠藤周作と歩く「長崎巡礼」』新潮社.

堀 憲昭編集 2007. 『旅する長崎学6 キリシタン文化 別冊 総集編』長崎文献社.

堀 憲昭編集・五野井隆史・デ・ルカ・レンゾ・片岡瑠美子監修 2006. 『旅する長崎学4 キリシタン文化』長崎文献社.